私のネクストステージ
―退職者への質問状― Vol.56

高校教師から プロ野球の 球団スタッフに

元公立高校教諭
土井 一生さん（62歳）2021年退職

【どい・かずお】1962年、佐賀県出身。法政大学工学部卒業後、公立中学校の教諭を経て、佐賀県の公立高校教諭に。工業高校で10年間教鞭を執った後、佐賀県立宇宙科学館の企画主任、佐賀県教育庁、佐賀県教育センターで情報教育などを担当する。52歳で教壇に戻り、特別支援学校、工業高校、商業高校で教頭を務めた。58歳で広島東洋カープの球団スタッフに転身し、さらに61歳で埼玉西武ライオンズの球団スタッフとなり現在に至る。

――現在、埼玉西武ライオンズの球団スタッフとして働かれている土井さんですが、もともと佐賀県の公立高校で数学を教えられていたそうですね。定年後については、どのように考えていたのですか。

教師という職業は文字通り子どもの教育が専門性であり、そのための知識や経験を積み重ねていますが、他の業界ではなかなか応用できないとよく言われます。ですから、定年延長や再任用の期限まで同じ仕事を続けていくものと多くの人が思い込んでいる節がありますし、私自身もそうでした。加えて、私は自身の人生の長期的なプランをあまり考える方ではなかったので、「自分なりのやり切った感で定年＋再任用を終えたい」としか考えてこなかったです。次のステップに向けての準備や努力といったことは、特に意識していなかったですね。

――では、高校教師からプロ野球の球団スタッフという転身の経緯を教えてください。

私は「数学」という学問が好きで、その面白さを子どもたちに伝えたいとの思いで教職に就いたのですが、教育庁関係部局等、教壇以外の部門に長く配属されていた時期がありました。そんな時、一度密かに私学の専修学校への転職に挑戦したことがありました。最終面接まで行き好感触だったので採用に期待が膨らんだのですが、結果は残念ながら不採用で、少々ショックでした。当時よく報道で、「就活中の学生が採用面接で落とされると人格が否定された気になる」ということを聞いていましたが、正に垣間見えるようでした。

その後、人事異動により再び学校で教育に勤しむことになり転職を考えることは無くなっていましたが、世間を知る上でたまに求人サイトを見ることはありました。

ある日、「教育」のキーワードで検索をしたところ、なぜかそこに広島東洋カープの販売管理の求人情報が表示されました。その職種は私には縁遠い分野でしたし、採用される可能性も皆無と思いましたが、子どもの頃からカープファンだった私は、「カープ」の文字を見て衝動的に応募フォームに入力して送信しました。

それから3カ月後、応募したことすら忘れていたある日、一本の電話がかかってきました。「数学教師の知識を生かして、野球のデータ分析をしてもらえませんか」と。只々驚きしかありませんでしたが、滅多に無いチャンスに運命的なものを感じ、定年を待たず転職することを決めました。

――随分と思い切った決断ですよね。

子ども2人は既に独立していたのでタイミング的に良かったですし、養護教諭として働いていた妻も「もう1年余りで定年だし、好きなことやったら？」と言ってくれました。単身赴任で生活費が2倍かかるため家計は楽ではありませんが、やり繰りすれば何とかなるだろうと、2021年8月末、教師の職を辞し、新天地へ向かいました。

――広島東洋カープでは、球団スタッフとして、どんな仕事を担当されたのですか。

球団の社員・スタッフのうちデータ分析担当は4名いましたが、50歳代は私だけで、あとのメンバーは概ね20～30歳代でした。その4名がチームとなって、球場に設置されたカメラで、投手が投げる球の速さや球・質・打者が振ったバットの軌道などを計測し、そのデータを分析して試合の戦略や選手の育成に役立てられるように

します。ツールを使った分析もある中で、私は素のデータから独自に分析することに挑み、特に投手の球質の特徴を数値化することに尽力しました。

――その約2年半後、埼玉西武ライオンズに転職されていますが、それはなぜですか。

チームの枠を超えた球団スタッフのネットワークがあるのですが、そこで知り合った人との雑談で「データ分析以外にも、若い選手の教育とかに携わってみたいですね」と何気なく話したところ、後日、お仕事の紹介を受けました。当時の仕事に不満はありませんでしたが、「三十年以上教育に携わってきた経験を、ぜひ生かしてほしい」との言葉に「この業界で〝教師〟というキャリアが生かせるなんて！」と心が動き、2024年1月から埼玉西武ライオンズの球団スタッフとして働いています。

――今もデータ分析はされているのですか。

データ分析は全業務の内のほんの一部で、選手たちが暮らす寮での仕事がメインです。4名いるスタッフがローテーションで24時間、選手たちが規則正しく生活し活躍できるようサポートしています。

このような寮での集団生活から社会性を身に付けることは、とても大切なことだと感じています。ただ、私は、そこに〝教師〟として「もう一歩」加えたいと考え始めました。若い選手たちに「物事の是非を自ら考える力」「人に対する思い」等の〝生きる力〟を育みたいとの強い思いから、月1回、「道徳」の授業のような時間を設ける提案をしました。毎回1つのテーマを掲げ、できるだけ対話的な話し方を意識しながら実践していますが、学校の授業のような指針もなく、まだまだ試行錯誤の連続です。

――なぜ、そのような提案を？

私は東日本大震災の3カ月後、被災地支援活動に行きました。その時以来、親交を深めさせていただいている被災者の方が、3年後、東北楽天ゴールデンイーグルスが日本一に輝いた時に「3年間頑張ってきたことへのご褒美をもらえたような気持ちです」と喜びのメールを送ってきたのです。私は日頃から〝生きる力〟の最大の原動力は「人の役に立てること、人を元気にできること」だと思っています。プロ野球の選手たちはそれをより多くの人たちに発揮できる職業であり、その思いを胸に、高みを目指してほしいし、そんなことを自ずと感じてもらえるようになればと。

選手もスタッフも若い人ばかりですし、バックグラウンドも私とは全く異なります。そのような環境で働くには、自分からコミュニケーションを取って、相手の声に耳を澄まし、理解するように努めなければと改めて感じているところです。まずは自分自身が若い人から学ぼうとする姿勢が欠かせません。

――仕事でやりがいを感じるのは？

私は野球に関して素人ですが、それでも選手の成長や活躍を共に味わうことができます。それが私にとっての最大の喜びであり、それは教師だった頃のやりがいにも似ています。そして何よりも、この年齢でこのような気持ちで仕事ができることを、常にありがたく感じながら日々業務にあたっています。

――転職して戸惑ったことは？

転職後の雇用形態は1年更新の契約社員や業務委託契約であるため、選手同様、毎年1年ごとの勝負というのが、これまで経験したことのないプレッシャーであり、また新鮮な刺激でもあります。あとは2024年分の確定申告を初めて自分でしなければならないことは私にとって未知の世界なので、戸惑いを感じています。

――読者へのメッセージをお願いします。

長く働いていれば、今の仕事に疑問を持つこともあるでしょう。そんな時は、世の中にどんな仕事があるのか自分がいる組織の外の情報を集めて、少し視野を広げてみてください。そうすることで、他の選択肢もあると思えたり、今の仕事の良さが見えてくることがあるかもしれません。

時代は刻々と変化していますし、キャリアと経験を積み上げていれば、自分では想像すらできなかったような場所でそれを生かせる機会が訪れるかもしれません。そのためには、今、目の前にある仕事に一生懸命取り組むことが大事だと思います。